

## 野良の言葉が持つ力



—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄—

年頭にあたってあらためてかみしめているのがHさんの言葉だ。筆者は山梨市牧丘町に設けた「みんなの家農土香（のどか）」を拠点に、1泊2日での「子どもの田舎体験教室」を隔月で年6回開いており、今年で16年目となる。この体験教室での田植えと稲刈りで毎年お世話になっているのがHさんである。Hさんは大の政治家嫌い、マスコミ嫌いで、この分野の人たちを相手にすることは一切ない。ここでも詳しく、かつ実名では語れないのが残念だ。

Hさんは当地の出身で、1930年生まれ。いろいろな事業の経営に当たってきたが、70歳になって大菩薩峠に近い棚田が点在する谷合で本格的に農業を始め、ここに古材を使って「洗心道場」を作り寄り合い場所にした。自らの田畑を耕作するうちに、周りの耕作放棄化しつつある田畑を預けられて徐々に耕作面積を広げてきた。Hさんが朝から夕方まで作業する姿を見て、お年寄りを中心にいろいろな人たちが出入りするようになり、勝手に皆で農作業を分担したり、洗心道場にあるいろりを囲んでお茶を飲みながら話し込んだりしていくようになって輪が広がってきた。

そうした流れの中で、田植え機やコンバイン等を導入し基本は機械作業で稲作をしてはいるものの、毎年、子どもに限らず大人も含めて手作業で田植えや稲刈りを体験できる場を提供してきた。その一環としてわれわれの田舎体験教室もここで、田植えや稲刈りをさせていただいている。

Hさんは「洗心道場」を開いてはいるものの、あらためて説教したり、まして座禅したりするようなことはまったくない。ひたすら農作業をして、休憩時間にお茶を飲みながらとつとつと語るだけ。しかしながらその中身がすごい。頭で作上げた言葉ではまったくなく、自らの体験、野良仕事で土や農作物、自然等と対話しながら身につけてきたものばかり。浄土真宗の世界でいう「妙好人」にも匹敵すると筆者は受け止め、お会いするたびにHさんが語る言葉を書きためてきた。

詳しくは拙著『農的社会をひらく』をご覧ください。できれば幸いであるが、ここでH氏の言葉をいくつか挙げておきたい。「もっともっとで人間は苦しんでいる。いらんいらんが幸せにする」「水、空気、土が人間を生かしてくれる。自分で何とかしようとする人間が一番ばか」「稲も里芋もウソは決して言わない」「必要なものはいっぱい転がっている。拾い物で十分」「すべては借り物、預かり物」「目に見えないものが一番の財産」「何もない。明日もないのが人間」「手で覚えたことは一生覚えている」「体で勉強する」「教えてもダメ。その人自らが気づかないと」

家内に一昨年の喜び、ガンが発覚。年明け7時間余の大手術でガンを摘出し、その後抗ガン治療を続け、目下、回復途上にある。この間の支えになったのが「悩んでみても、何とかなら悩むのもいいが、悩んでなんとかならぬわけでもない。悩んでもしょうがない」とのHさんの話。要は生きるも死ぬも、自分でどうのこうのと決められるものではない。天に任せるだけだ、ということで、気持ちを立て直すことができた。今年もHさんの言葉から力をいただいきたい。



蔦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業。1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長。常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表。

〔主な著書〕

「未来を耕す農的社会」「農的社会をひらく」「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上創森社）  
「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）など



田植えでHさんを囲んでの集合写真

でH氏の言葉をいくつか挙げておきたい。「もっともっとで人間は苦しんでいる。いらんいらんが幸せにする」「水、空気、土が人間を生かしてくれる。自分で何とかしようとする人間が一番ばか」「稲も里芋もウソは決して言わない」「必要なものはいっぱい転がっている。拾い物で十分」「すべては借り物、預かり物」「目に見えないものが一番の財産」「何もない。明日もないのが人間」「手で覚えたことは一生覚えている」「体で勉強する」「教えてもダメ。その人自らが気づかないと」

家内に一昨年の喜び、ガンが発覚。年明け7時間余の大手術でガンを摘出し、その後抗ガン治療を続け、目下、回復途上にある。この間の支えになったのが「悩んでみても、何とかなら悩むのもいいが、悩んでなんとかならぬわけでもない。悩んでもしょうがない」とのHさんの話。要は生きるも死ぬも、自分でどうのこうのと決められるものではない。天に任せるだけだ、ということで、気持ちを立て直すことができた。今年もHさんの言葉から力をいただいきたい。